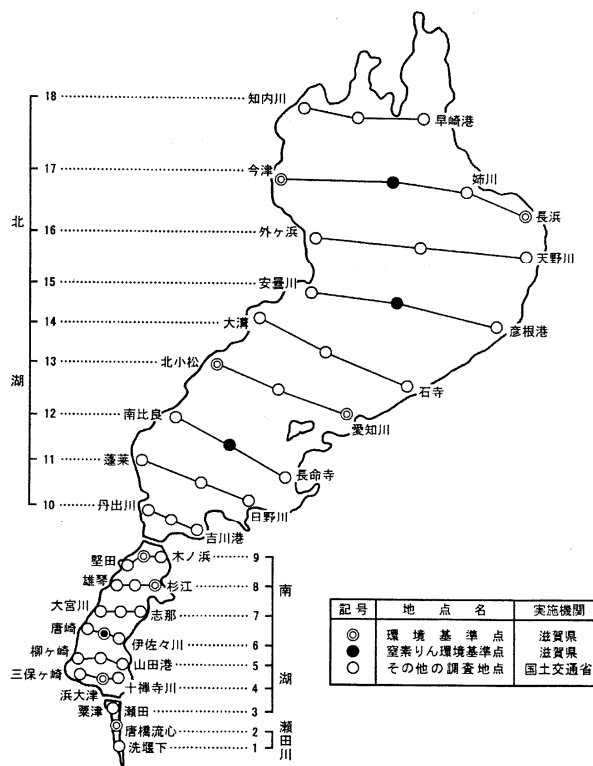


1. 琵琶湖

琵琶湖の水質に関しては、これまでも生活排水や工業排水を処理する下水道の整備や農村地域への農業集落排水施設整備、排水規制などの発生源対策を中心に、さまざまな汚濁負荷削減対策が実施されてきた。しかしながら、南湖は、沿岸域で都市化が進行し、工業も発達していることから汚濁負荷の流入量が多く、また貯水量も北湖より圧倒的に少ないため、北湖に比して水質が悪い。また富栄養化は依然継続しており、淡水赤潮は沈静化傾向にあるものの、アオコについては北湖・南湖ともに発生が確認されている。さらにここ数年、琵琶湖ではBODが減少傾向を示しているのに対し、CODは漸増傾向を示しているというBODとCODの乖離現象がみられる。これは、水中で分解されにくい有機物が増大してきていることを示唆しているが、不明な点が多く、今後の解明が待たれる。



出典：滋賀県「平成18年（2006年）版環境白書」

(1) 水質指標等の変化

① 北湖

北湖は北西部が最も深く、最大水深は約104m、平均水深は約43mであり、水質は比較的良好である。

透明度は年度によって変動するが、ほぼ4～6mの間で推移しており、平成18年度の年平均値は6.5mであった。

COD（75%値）は昭和50年度頃からほぼ横ばい傾向を示している。平成18年度は2.5mg/lであり、環境基準値（1.0mg/l）を上回っている。

全窒素（年平均値）は平成7年度以降横ばい傾向であり、平成18年度は0.27mg/lであった。これは環境基準値0.20mg/lを上回っている。

一方、全りん（年平均値）は0.01mg/l以下で推移しており、環境基準値0.01mg/lを達成している。

② 南湖

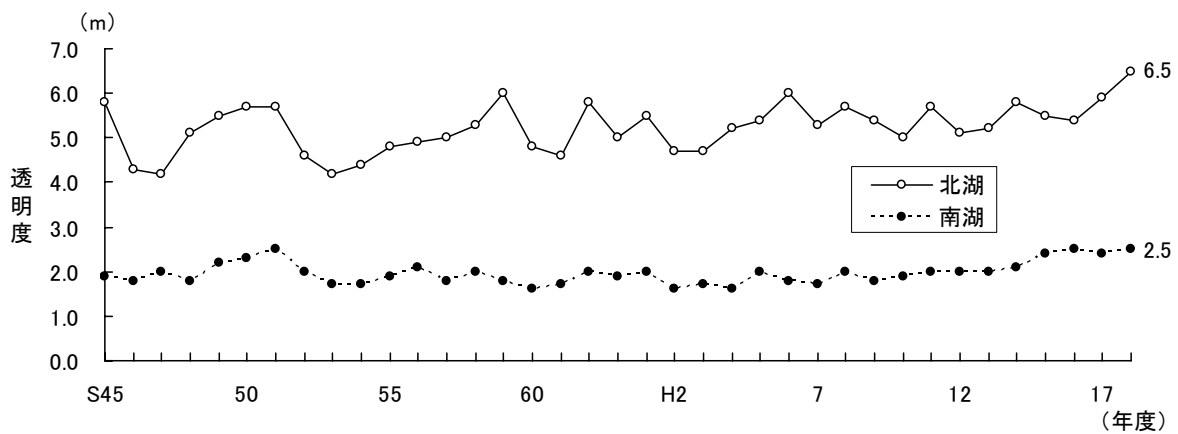
南湖は周辺沿岸部からの汚濁負荷が多く、水深が4～7m程度と非常に浅いので、北湖と比べて水質が悪く、特に東部や南部では汚濁が進行している。

水質の経年変化をみると、透明度は2m前後で推移しており、平成18年度の年平均値は2.5mであった。

COD（75%値）は昭和52年度以降減少したが、その後漸増傾向を示している。平成18年度は3.7mg/lであり、環境基準値（1.0mg/l）を上回っている。

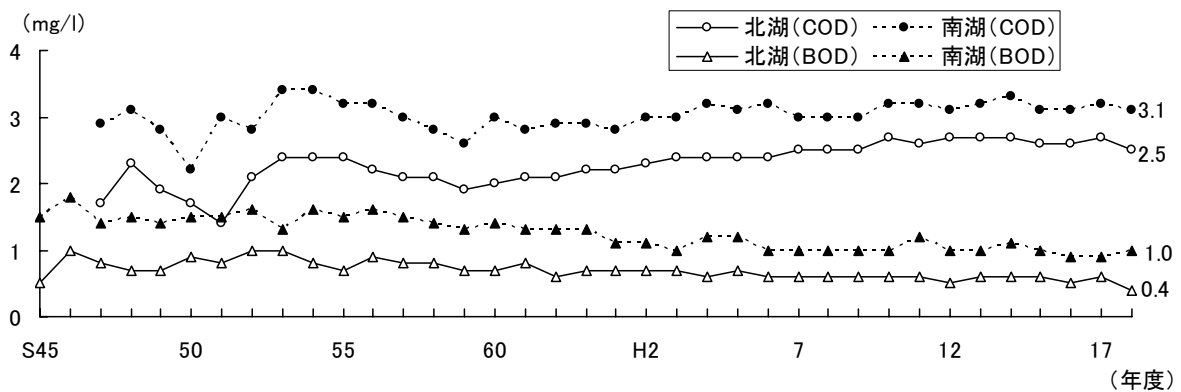
全窒素（年平均値）は昭和50年度に0.5mg/lを超え、昭和63年度以降は0.4mg/l程度で推移してきた。平成7年度以降減少傾向であったが、平成13年度以降は横ばい傾向であり、平成18年度は0.31mg/lであった。これは環境基準値0.20mg/lを上回っている。

全りん（年平均値）は昭和61年度以降0.020～0.025mg/lで推移しながら若干の改善傾向が見受けられ、平成7年度以降は、0.020mg/l以下で、ほぼ横ばいの状態が続いている。平成18年度は0.015mg/lであり、環境基準値0.01mg/lを達成していない。



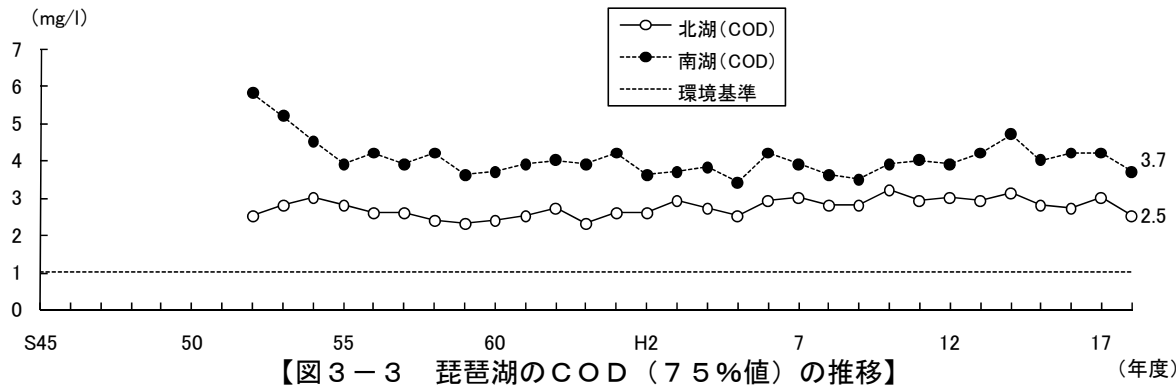
【図3-1 琵琶湖の透明度（年平均値）の推移】

注) 北湖28定点、南湖19定点それぞれの平均値
滋賀県環境白書より作成
詳細は資料3-6を参照

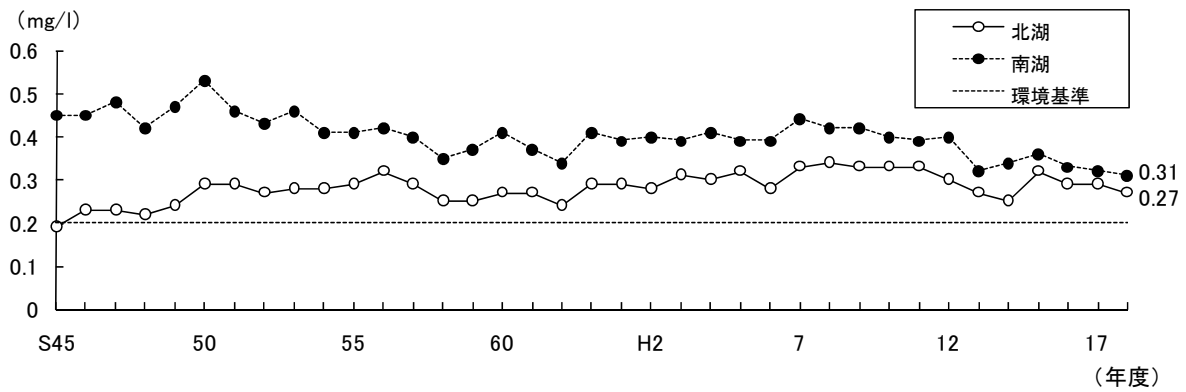


【図3-2 琵琶湖のCODおよびBOD（年平均値）の推移】

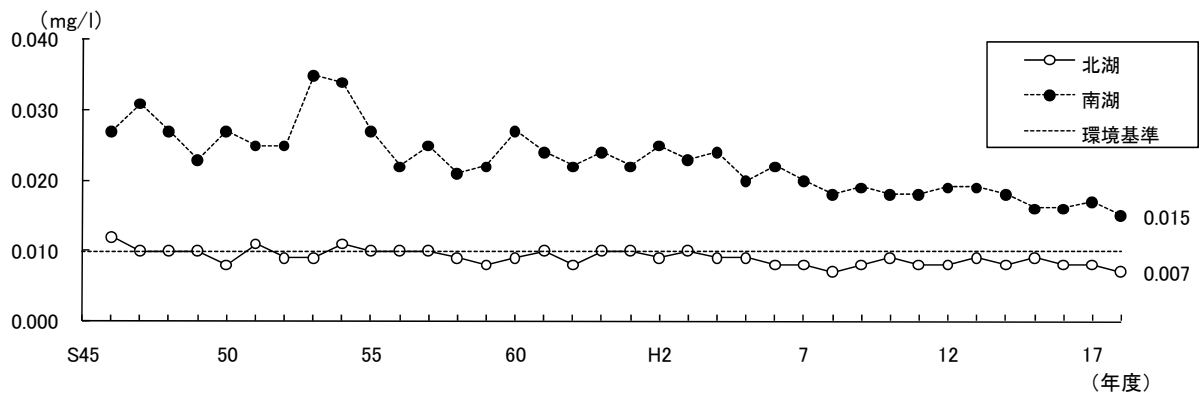
注) 北湖28定点、南湖19定点それぞれの平均値
滋賀県環境白書より作成
詳細は資料3-7、資料3-10を参照



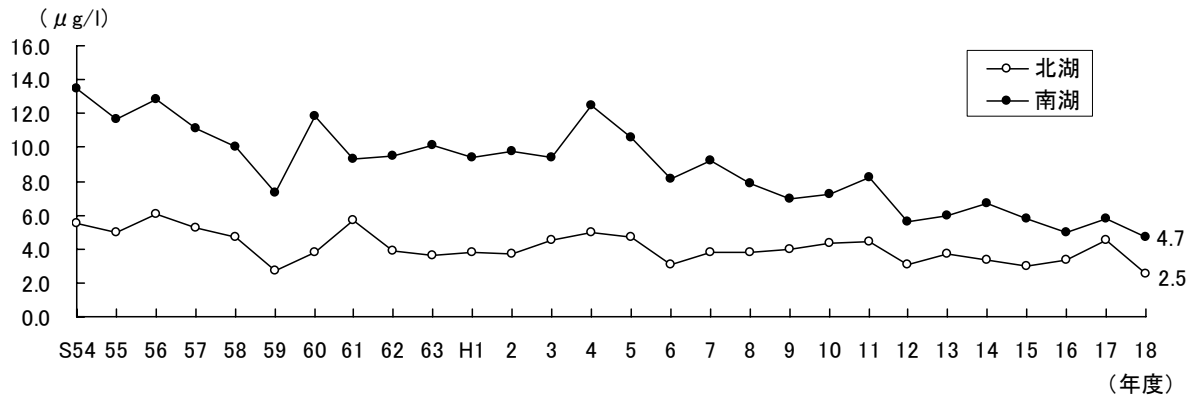
注) 北湖28定点、南湖19定点の75%値の平均値
滋賀県環境白書より作成
詳細は資料3-7、資料3-10を参照



滋賀県環境白書より作成
詳細は資料3-8を参照



滋賀県環境白書より作成
詳細は資料3-9を参照



【図3-6 琵琶湖のクロロフィルaの推移】

滋賀県環境白書より作成